

『例解古語辞典 第三版』と『雅言集覧』

平井 吾門

1. はじめに

近世辞書『雅言集覧』の用例が『言海』等を通じて近代辞書に受容されていったことは従来の諸研究によって知られているが、それらの用例が現代にまでどのように影響を及ぼしているのか、という課題が依然として残る。また、戦後刊行されてきた古語辞書の中には、従来の用例をそのまま継承していくことに対して批判的な立場を表明し、一から用例を集め直したということを謳っているものも見られる。これらのことは、いずれにしても近現代辞書が近世辞書をどう意識してきたかという問題につながる。そこで、具体的に一から用例を集め直したと謳う辞書と『雅言集覧』とを比較してみたい。もちろん、「一から用例を検証して集めたと言いつつも、実は先行辞書を参考にしていないのではないか？」と指摘していくことを目的としたものではなく、あくまで現代的視点で精選された用例を通じて、『雅言集覧』の用例がどのような特色を持っているかを検証していくためのものである。ここでは、用例採集に定評のある『三省堂例解古語辞典』（第三版）を取り上げる。

2. 先行研究と『例解古語辞典』の特色

『雅言集覧』を含めた近世辞書と近代辞書との接続について考察した研究は、犬飼（1985）や湯浅（2002）、内田（2016）等々諸論考が示されてきた。その一方で、現代通用している古語辞典について、近世辞書との対照から検証したものはほとんど見られない⁽¹⁾。筆者は、これまで『倭訓栞』『雅言集覧』を中心とした近世辞書の再評価を進める中で、現代古語辞書と近世辞書との比較の必要性を認めるに至っている。特に、数多くの古典語用例を載せる『雅言集覧』は、用例の選定基準や排列等に未解明の問題が山積しているため、現行の辞書の水準を判断指標に持ち込むことが有用である。拙稿(2021)では、『古語大辞典』（小学館、1983）における『源氏物語』と『枕草子』の用例を『雅言集覧』の用例と対照させることで、『雅言集覧』が適切な用例を的確に抽出するとともに、現代的観点に繋がる立項態度をも有していることを示した。ただ、『古語大辞典』（小学館）も独自の用例を大切に辞書であることを標榜しているものの、55000語を誇る中型辞典であることから、より用例や立項に制限のある小型辞書を通じた調査の必要性もまた見えてきた。近世も現代も商用の辞書には紙幅の制限が付き物であり、文脈から切り出す用例の長さや、一項目における用例数といった細かな視点を比較することが可能となるからである。特に、上代語から近世語まで手厚くカバーするよりも、上代語から中世前期あたりの語に傾斜している辞書であれば、『雅言集覧』と位相も重なり比較材料として好適と言える。

用例を徹底して見直し、語釈を導く用例を適切に配置した「例解」方式を取ること
を一番の売りとする『例解古語辞典』について、研究レベルで具体的にその価値を論

じたものは管見の限り見られない。ただし、同書については、出版社で品切れとなる今もインターネット上にいくつかのレビューを見つけることができる。

現時点では初版から第三版まで刊行されてきたが、刊行に至る経緯を記した初版の「あとがき」には次の通り記されている。

『例解古語辞典』を編修するに至った経緯を記して、跋文に代えたい。

『時代別国語大辞典 上代編』は、すでに世に出て久しく、その水準の高さのゆえに、後続の諸編を早く完成させるようにという江湖の要望が日ましにつのっている。ところが、当初、そのあとを追いかけて刊行される手はずになっていた平安時代編は、牛歩を続けて、いまだに確実なめどをたてかねている状態にある。それには、さまざまな要因もからんでいるが、遅延の最大の理由は、資料とすべき文献が読み解けていないところにある。

辞書の編修作業においては、採録すべき項目の選り好みは許されないから、難しいことばに行き当たって、その用法を徹底的に調査し、結果について討議していくと、ただ一つの項目の語義決定に延々数時間を費やしても結論が出せず、二回三回にわたることすら少なくはない。このような辞書の編修を企てるのは、現今の研究水準に照らして時期尚早なのではないかという感じをいだきながら、われわれ編修委員は、なお開拓的な努力を継続しつつある。(以下略)

これは『例解古語辞典』編著者の一人である佐伯梅友氏の文章であるが、ここで「われわれ編修委員」と言っているのは『時代別国語大辞典 平安編』の編修者であり、これに続いて『三省堂古語辞典』そして『例解古語大辞典』の出版に至る経緯が記されている。この流れを見ても、『例解古語辞典』の編著者たちが『時代別国語大辞典 上代篇』に続く平安時代を中心とした古語辞書を強く意識していることが分かる⁽²⁾。中古から中世前期の語を中心に据えることは、中古和文を核に学ぶ学習用古語辞書の役割にも合う。

『例解古語辞典』が具体的にどのような編纂方針の下で編まれていったのかについても同書中に記載がある。用例を大切にしてい「例解」という方式のあるべき姿を示した初版掲載の文章「古典へのいざない」は、改訂を経て手を加えられつつ、第三版では「古典の表現に迫る辞書」「解釈の道筋」として示されている⁽³⁾。「第二版 あとがき」では、「初版の段階では、例解方式の正統性を強調しながら、実践の面でその理想に及ばないところが多かった。この第二版の内容こそが例解という名称にふさわしいものにしたいと考えたが、依然として満足できる形にはほど遠い。利用者各位の声を反映しながら改善を続けていきたい。」とあり、「第三版 あとがき」では「全体の枠組みは第二版でほぼ出来あがっているので、第三版の改訂は全項目の点検整備による洗練・充実を主眼とした。」とあるため、本論では第三版を一つの指標として『雅言集覧』との対照の対象としていく所以である。なお、第三版の「序」には、「辞書は永遠に完成しない。改訂版の刊行は、つぎの改訂作業の始まりを意味している。」とあるが、その後刊行が続いていないことを見ても、諸事情はあるにせよある程度の成果を第三版に見ることができよう。

『例解古語辞典 第三版』「古典の表現に迫る辞書」では、用例の扱いについて次のように記されている。

例解の方式で項目のかなめになるのは用例です。引用されている用例を読めば意味・用法が具体的にわかり、語義解説も納得できるのが理想です。この辞書は、有職故実関係など一部の項目を除いて、その原理で一貫されています。

項目によっては、引用できる用例が一つしかない場合があります。弧例もありますし、複数の用例が拾い出せても、ほとんど読まれない作品に見えるものは採用しないのがこの辞書の基本原則ですから、結局、『更級日記』とか『平家物語』とかいう作品の用例が一つだけ残ることもあります。(以下略)

続けて、具体的に用例を選んでいく基準が示されている。抄出すれば、次のような要素として示される。

- ①「よく読まれる作品の、よく読まれる部分に出てくる用例を優先する」「複数の用例があれば、著名な方を引用」
- ②「その語句が文脈からよく理解できるもの」「適切な用例でも構文の解きほぐしや文脈の補いが必要な場合には「解」を添えて全体の意味が通るようにしてあります」

語義解釈に通じる用例を選んでいるという点は、『雅言集覧』の中にも見られるものであるが(拙稿 2019)、共有されている用例があれば『雅言集覧』の用例選定基準の解明につながる。「よく読まれる作品」という括りがあまり客観的ではないが、『源氏物語』『枕草子』などの学校教育で扱われてきた教材を中心に行っている点は、『雅言集覧』の位相とも重なる。『例解古語辞典 第三版』「解釈の道すじ」には、

私家集のすべてが眉つばとは限りませんが、専門家以外の目に触れることの少ない作品群なので、用例欄に正式に引用するものは、もっと信頼性が高く、利用者が実際に読む可能性のある作品の中から選んでいます。

『宇津保物語』『浜松中納言物語』などにも使われていますが、あまり読まれない作品なので、選択の対象は『源氏物語』の三例です。

とも記されており、テキストの信頼性もあわせて加味されていることが分かる。この点は、近世と現代との研究水準の差が現れ得る点であることに留意すべきである。

また、語義の在り方については、「古典の表現に迫る辞書」に次のように記されている。

語義を五つに分けた辞書の方が三つに分けた辞書よりも親切だとは限りません。末梢にとらわれずに根幹でまとめた方がわかりやすい場合は少なくないし、

また、珍しい作品にみえる特殊な用法まで無差別にあげたのではノイズになってしまうからです。この辞書では、語義をむやみに細分せず、意味の広がりや正しく理解できるように解説することを心がけています。

意味区分が細分化した辞書では、『雅言集覧』との対応を考える際に厄介になることがしばしばあるため、このような方針であることもまた、意味区分の在り様が未解明である近世辞書の調査には向いていると言える。拙稿（2019、2021）で述べてきた通り、『雅言集覧』の特色として有名な出典で語義の分かりやすい所を取る傾向のある事が分かっているので、重なるところが大きいのではないかという予想が立つし、重ならなくても現代的視点から『雅言集覧』を再評価できるからである。

3. 調査内容

まず、『例解古語辞典 第三版』「い」部に挙げられた用例のうち、どれほど『雅言集覧』の用例と一致するかを見ていく。「い」部に限るのは、多様な辞書との比較を見据えたサンプル調査であることと、五十音順に編まれた現代辞書とイロハ順に編まれた『雅言集覧』との対照を考えたときに、冒頭に近い部の方が編纂初期の姿がより現れやすいと考えられるからである。『例解古語辞典 第三版』の「い」部には親項目子項目合わせて 858 の見出し項目が立っており、そのうち 38 は送り項目であるため考察から除外する。

いかに一か【如何にか】〈連語〉いかがに同じ。

のように他の項目を引き合いに出しただけの項目もあるが、

いざ-たまへづ【いざ給へ】〈句〉⇨「いざ」の項の子項目

のように、矢印で明示された送り項目以外は語釈の一つの在り方であると認めて除外していない。送り項目を除いた 820 項目について見てみると、用例は全部で 1108 例見られ、そのうち『雅言集覧』の扱う時代と重なる中世前期までの資料は 920 例見られる⁽⁴⁾。なお、必要に応じて項目に付される「要説」にある用例も数えている。「解釈の道すじ」において「必要なのは「少女」の巻の箱のふたにのせて奉ったという即物的な例ですが、要説欄で使いたいのので、「胡蝶」の巻の方を選びました。」などと書かれているように、必要な用例を適宜要説欄における解説のために使用する傾向があるからである。

『雅言集覧』「い」部では、親項目・子項目合わせて 2248 項目が掲げられている。『例解古語辞典』が意味区分を①②……のようなブランチを立てて記述するのに対して、『雅言集覧』は意味の差によって親項目を変える場合と、一つの親項目の中で「・」を用いて細かな意味の差異を示す場合とがあり、立項や排列の基準が異なるため両者の単純な比較はできないが、『例解古語辞典 第三版』で立項された項目に対応する項目の用例は約 2000 例ある。単純比較では、用例集とも目されてきた『雅言集覧』の方

が多いものの、『例解古語辞典 第三版』の立項した項目には中世後期以降に見られる語句もあり、送り項目を除いた 820 項目のうち 365 項目では『雅言集覧』での立項が確認できない。そこで、『雅言集覧』に立項されている 455 項目の中で、どのような用例がそれぞれ使われているのかを比較することになる。

また、使用されている用例が古典作品の中でどれくらいの使用例があるのか、その概略をつかむ必要がある。『例解古語辞典 第三版』『雅言集覧』ともに、有名作品を典拠としつつ、それぞれ分かりやすさといった意図を以て用例を選定しているが、『例解古語辞典 第三版』「古典の表現に迫る辞書」が示す通り弧例もあり得るため、どれほどの分母からそれぞれその用例が選られているのかを考えるためである。近世と現代とでは底本の差も大きく、時代時代で有名作品やよく読まれる作品というのは変化するものであるから、これも単純比較は難しいので、「日本語歴史コーパス」(CHJ)や『日本古典対照分類語彙表』(笠間書院)を利用して概略を比較していく。

4. 調査結果

4. 1 概観

まず、『例解古語辞典 第三版』「い」部に見られる中世前期までの用例 932 例のうち、5 例以上の用例を提供している典拠を挙げてみると次の【表 1】のようになる。

【表 1】		土佐日記	31	今昔物語集	8
源氏物語	171	竹取物語	28	古事記	7
徒然草	147	方丈記	28	大和物語	6
万葉集	117	更級日記	27	落窪物語	6
平家物語	99	大鏡	20	宇津保物語	5
古今集	50	蜻蛉日記	14	拾遺集	5
枕草子	49	新古今集	11	堤中納言物語	5
伊勢物語	34	宇治拾遺物語	8		

同様に、『雅言集覧』「い」部において『例解古語辞典 第三版』と対応する箇所の用例のうち、9 例以上が認められるものは次の【表 2】の通りである。『雅言集覧』は親見出しや子見出しの体裁の関係で用例の単純な計測は難しいため、細かな数値に多少の出入りはあるが、概数としては大きくは動かない。

【表 2】		古今六帖	39	大和物語	18
源氏物語	649	後撰集	35	新古今集	17
枕草子	147	後拾遺集	33	古事記	12
古今集	101	宇治拾遺物語	31	詞花集	11
宇津保物語	100	土佐日記	30	千載集	11
万葉集	78	狭衣物語	29	浜松中納言物語	11
伊勢物語	68	倭名抄	28	白氏文集	10
拾遺集	50	落窪物語	24	徒然草	9
夫木抄	44	蜻蛉日記	24	神代紀	8
竹取物語	41	栄花物語	20	遊仙窟	8

【表 1】【表 2】を見比べると、『源氏物語』の用例数が最も多い点は共通するものの、

『徒然草』『平家物語』『方丈記』『更級日記』『宇津保物語』『大鏡』『今昔物語集』『拾遺集』の扱いは大きく異なる。『例解古語辞典 第三版』を基準にして、『雅言集覧』と用例数の順位を対照させると、次の【表3】のようになる。

【表3】順位対照	『例解』	『雅言』
源氏物語	1	1
徒然草	2	27
万葉集	3	5
平家物語	4	圏外
古今集	5	3
枕草子	6	2
伊勢物語	7	6
土佐日記	8	14
竹取物語	9	9
方丈記	10	圏外
更級日記	11	圏外
大鏡	12	圏外
蜻蛉日記	13	17
新古今集	15	21
宇治拾遺物語	16	13
今昔物語集	16	圏外
古事記	18	22
大和物語	19	20
落窪物語	19	17
宇津保物語	21	3
拾遺集	21	7
堤中納言物語	23	圏外

『今昔物語集』『方丈記』『堤中納言物語』は、『雅言集覧』の当該箇所では一切用いられていない。なお、『今昔物語集』と『宇治拾遺物語集』は同様の説話を扱うことも多いが、『雅言集覧』と『例解古語辞典 第三版』が両者の同じ場面を切り取っている「いつもつ（逸物）」のような項目もある。

【例解】 乗りたる馬、(中略) いみじき——にてありければ (今昔物語集)

【雅言】 のりたる馬いとかしこしとも見えざりつれどいみじき逸物にてありければ (宇治拾遺物語)

『徒然草』は『雅言集覧』の当該範囲には6例しか見られず、表外であるが『平家物語』『更級日記』『大鏡』もそれぞれ3例2例2例しか見られない。一方『雅言集覧』

で多用される『宇津保物語』は、『例解古語辞典 第三版』ではほとんど用いられていない。これはもちろん「読まれる作品」か否かという基準によるものであろう。そのような中で、『例解古語辞典 第三版』が敢えて取り上げている『宇津保物語』の用例は個々に見ていく必要がある。全体でどれほどの用例が一致しているのかを示したのちに、個々の用例を検討していきたい。

『例解古語辞典 第三版』と『雅言集覧』が共に立項している455項目のうち、用例が一つでも一致しているものは185項目(215用例)見られる。その中でも112項目は、『例解古語辞典 第三版』の挙げた用例が『雅言集覧』の用例と全て一致している。『例解古語辞典 第三版』の用例が一つの場合には必然的に一致することになるが、用例が複数ある次の9項目も全て一致している(()内は『例解古語辞典 第三版』の用例数を示す。)

いう(2)、いさ(2)、いそがくる(2)、いたづらびと(2)、いちはやし(4)、いづら(2)、いでたちいそぎ(2)、忌む事(2)、いららぐ(2)

『例解古語辞典 第三版』では、一つの意味区分に対して一つの用例を示すのが基本で、必要に応じて(a)(b)……を付して複数の用例を挙げている。1例のみの場合よりも分かりやすくなるという意図であるが(P1052)、逆に1例のみのものは「例解方式」に耐える用例だということが言えそうである。

4. 2 『例解古語辞典 第三版』用例が全て『雅言集覧』用例に含まれるもの

まず、『例解古語辞典 第三版』の4つの用例が全て『雅言集覧』内の用例と一致した「いちはやし」の状況を確認しておきたい。『例解古語辞典 第三版』の語釈と用例を抄出する。

いち-はやし【いち早し】(形ク 45)(行動や反応のありかたなどの激しさやすばやさを表わす) ①激しい。一途^{いちだ}だ。②(気性が) 厳しい。情け容赦がない。恐ろしい。③すばやい。気が早い。

用例①(a)「昔人^{むかしひと}は、かく一・き雅^{みやび}びをなむ、しける」[伊勢・一段] 解「昔人」は、『伊勢物語』の主人公をさす。主人公が元服したばかりのころ、美しい姉妹をかいまみて、とっさに情熱あふれる恋歌を詠んで相手に贈った。その一途で積極果敢な振る舞いを「いちはやき雅び」と評したもの。(b)「暗う(=暗クナッテ)家に帰りて、うち寝たるほどに、門^{かど}一・く叩^{たた}たく。胸うちつぶれて覚^さめたれば」[蜻蛉・天禄三年] ②「后^{きさき}の御心、一・くて、かたがた思^{おも}しつめたることどもの報^{むか}ひせむと思^{おも}すべかめり」[源氏・賢木] 解「かたがた思しつめたることどもの報ひ」は、あれこれと今まで胸のなかに思いつめていたことの報復、ということ。③(a)「(寺ノ周囲ハ)めぐりて山なれば、昼も人や見むの疑ひなし。簾^{たな}巻き上げて、などあるに、この時過ぎたる鶯^{うぐ}の鳴き鳴きて、木の立ち枯らしに『ひとくひとく』とのみ、一・く言ふにぞ、簾^{たな}下^{おろ}しつべくおぼゆる」[蜻蛉・天禄二年] 解人にのぞき見られる心配がないと気を許していた

ところ、その油断を見すかすように、時節はずれのウグイスが「人が来るよ人が来るよ」と、おどかすように間髪を入れずばやきで鳴きたてた、ということ。この季節は旧暦六月。「ひとくひとく」は小鳥の鳴き声の描写で、それを「人来・人来」と聞きなしたもの。この例については、①の意味とする解釈もある。(b)「一・きとは、逸早と書く。すぐれてすみやかなる心なり。これによりて、人の性の急に思ひのどめぬをば、一・きといふなり」〔伊勢物語愚見抄〕
解『伊勢物語愚見抄』は、室町時代の注釈書、用例①の(a)の「いちはやき」についての解釈の部分。

要説語釈を①②③と分けたが、相互に重なり合っていて、機械的に分離できない。同じ例も、文脈のとらえ方、焦点の置き方などによって解釈に微妙な差が生ずる。用例①の(a)は、現代では、激しい・積極果敢だの意とみる解釈が多いが、中世では、用例③の(b)に挙げたように、③の意味に解釈されている。機械的に割り切るだけではあじけない解釈になるということに注意したい。

さらに、これに続いて囲み欄で「要説」を立て、トータルでページの半分ほどを費やした記述となっている。もちろん他の項目が全てこのボリュームで示されるわけではなく、編纂者のこだわりのある語について適宜スペースを割いて詳説が加えられている。すなわち、この「いちはやし」の項目は編纂者のこだわりが見られるということになるが、その結果『雅言集覧』に挙げられた用例を抜き出していることの意味は大きい。

『雅言集覧』において、「いちはやし」にまつわる用例は「延喜式、舒明紀、古事記、伊勢物語、蜻蛉日記、源氏物語（須磨）、源氏物語（須磨）、宇津保物語、蜻蛉日記、蜻蛉日記、蜻蛉日記、源氏物語（賢木）、大和物語、宇治拾遺物語、源平盛衰記、散木集」の16例が挙げられている（掲載順）。「いちはやく」「いちはやき」といった語形変化ごとの用例も含まれているが、合わせて『蜻蛉日記』は4例、『源氏物語』は3例見られる。そもそも中世前期までの文学作品に「いちはやし」がどれだけ出てくるのかということが問題となるが、CHJでは「伊勢物語、大和物語、蜻蛉日記×6、枕草子、源氏物語×4、宇治拾遺物語、十訓抄」の15例、『日本古典対照分類語彙表』では「伊勢物語、蜻蛉日記×6、枕草子、源氏物語×4、宇治拾遺物語、平家物語」の14例を挙げている。『雅言集覧』が網羅的に挙例していることが分かり、結果的に語義解釈に不可欠な例を着実に抑えていることが指摘できる。

『雅言集覧』の挙例が網羅的であるため、『例解古語辞典 第三版』の用例が『雅言集覧』と重なるのはほぼ当たり前だと言えるが、ここで重要なのは『雅言集覧』がこの項目を網羅的に扱っているという事実である。『雅言集覧』の全ての項目が用例を網羅的に挙げているわけではなく、紙幅の都合もあるため数ある用例のうちの1、2例しか挙げないことが大半である。そのような中で、「いちはやし」に重点的に用例を集めているということ自体が、『例解古語辞典 第三版』に通じる点である。大学受験の世界を含めて、現代では「基本語」「重要語」といった概念で古典語を括ることは半ば常識であり、そのような語は古語辞書においても解説が手厚くなるのが珍しくない。近世辞書が用例数を割いて注目した「基本語」「重要語」が、現代の古語辞書でも着目

されていること自体が、近世辞書の先見性を示している。

続いて、『例解古語辞典 第三版』の挙げた2例が『雅言集覧』と一致する項目もいくつか見ておきたい。

「いう（優）」は『例解古語辞典 第三版』において「竹取物語、源氏物語（帚木）」が挙げられており、『雅言集覧』では「竹取物語、源氏物語（帚木）、源氏物語（手習）、天徳歌合、源氏物語（葵）、源氏物語（絵合）、源氏物語（若菜下）」の7例が挙げられている。『例解古語辞典 第三版』の意味区分は1つだが、「上品で、優雅なようす。また、風流なようす。」のように「また」を使って意味に広がりのある記述をしている。しかし、用例は「かぐや姫の容貌——におはすなり」（竹取）と「とる方（＝イイ点ガ）なく口惜しき際と、——なりとおぼゆばかりすぐれたる（場合）とは数等しくこそ侍らめ」（源氏）であり、2例挙げているものの「風流なようす」を端的に示すものはない。『源氏物語』の用例には「若い貴公子たちが集まって女性論評をしている「雨夜の品定め」の一節。全くだめな女性と極めて優れた女性とはともに数が少ない、ということ。」という解説が付されている。

ここで、CHJにおいては「竹取物語、源氏物語×5、大鏡×16、方丈記、海道記、建礼門院右京大夫集、十訓抄×23、とはずがたり×2、徒然草×4」の計54例、『日本古典対照分類語彙表』では「竹取物語、源氏物語×6、更級日記、大鏡×16、方丈記、平家物語×23、徒然草×4」の計52例を見出すことができる。「読まれる古典」という観点から『海道記』や『とはずがたり』の用例が選ばれないのはともかく、『源氏物語』の他箇所や『平家物語』『徒然草』のように『例解古語辞典 第三版』で多用される典拠から、解説や括弧で補助的な説明を要さずに済む用例が挙げられることを考えると不審である。

「いう」に関しては、語釈が極端に少ない『雅言集覧』において、「ヤサシクシトヤカナル意也 形にも藝能にもいへり 夕顔の巻に花の名は人めきてとかけるも貴人は優なるおもゝちなればいへり」という語釈が付されており、「源氏物語（手習）」と「天徳歌合」の用例の間が「・」で区切られている。『雅言集覧』における記号「・」は、異なる親見出しを立てるほどではない意味区分の差異が語釈で示された場合に、それぞれに対応した用例を示すために用いられる。すなわち、「竹取、源氏物語（帚木）、源氏物語（手習）」の例は「形」について、「天徳歌合、源氏物語（葵）、源氏物語（絵合）、源氏物語（若菜下）」の例は「藝能」について述べていると解釈できる。なお、拙稿（2021）で扱った『古語大辞典』（小学館）の「いう（優）」を引いてみると、次のごとく詳細が載る。

いう【優】^{ナリ}〔形動ナリ活〕（原義は、優れている、勝っているの意。中古から中世にかけて多義化する）①優れている。すばらしい。「取る方なく口惜しき際と、一・なりと覚ゆばかりすぐれたるとは、数等しくこそ侍らめ」〈源氏・帚木〉。「さすがに遊ばしたる和歌はいづれも人の口に乘らぬなく、一・にこそ承れ」〈大鏡・伊尹〉②優雅だ。上品だ。「桜の花は一・なるに、枝さしのこはごはしく、もとのやうなども憎し」〈大鏡・伊尹〉。「内侍所のみ鈴の音は、めでたく一・なるものなり」〈徒然草・二三〉。③美しい。優美だ。「かぐや姫のかたち一・に

おはすなり。よく見て参るべき」〈竹取・御門の求婚〉。「さてもただ今の女房は一・なりつるかな」〈平家・一〇・千手前〉。④趣深い。風流だ。「わざとはなく口ずさみのやうにうたはせ給ひしが、なかなか一・に覚え侍りし」〈大鏡・昔物語〉。「事様の一・に覚えて、物の隠れよりしばし見みたるに」〈徒然草・三二〉。⑤首相だ。けなげだ。「末の世まで伝ふるばかりの事言ひ置く人一・に侍りかしな」〈大鏡・村上〉。「味方の御勢は皆落ち候ふに、ただ一騎残らせ給ひたるこそ一・なれ」〈平家・七・実盛〉。⑥優しい。穏やかだ。「人あひ心様一・に情けありければ、倉光もねんごろにもてなしけり」〈平家・八・瀬尾最期〉。「弘融僧都、『一・に情けありける三蔵かな』と言ひたりし」〈徒然草・八四〉→いうす

語誌 奈良・平安時代の漢詩では、ゆったりとしたみやびやかさを意味し、平安時代の歌合わせの評語としては理想的だの意に用いられた。「優」の基本的性質は、(1)ゆったりと落ち着いた、(2)上品典雅な、(3)古典的教養のある美であって。源氏物語では、人・筆跡・琴・絵合わせについて用いられている。平安女流文学には用例が少ないが、男子作品には多く用いられ、大鏡では桜の花のような自然物にも、平家物語では心根が優しい、情愛が深い、振る舞いが殊勝だ、けなげだと感心するような場合にも用いられるようになった。天草版平家物語、さらには江戸時代の作品にも用例が散見するが、口頭語としてはすたれていたようである。〔木之下正雄〕

『古語大辞典』のように語釈に分量を割けないとはいえ、意味用法の面からも位相や文体の面からも、当該の『例解古語辞典 第三版』の用例は『雅言集覧』にもやや後れを取っていると評価せざるを得ない。もちろん、『例解古語辞典 第三版』が意味区分を敢えて絞っているという説明はここでは通用しない。

もう一つ、『例解古語辞典 第三版』では珍しい『宇津保物語』が用例の一つとして挙げられている「いたづらびと」を見てみたい。『例解古語辞典 第三版』と『雅言集覧』の語釈はそれぞれ次の通りである。

【例解】 いたづら-びと **【徒ら人】** 〈名〉 ①役にたたない人。のらくら者。②落ちぶれてしまった人。

【用例】 ①「忠雅^{ただまさ}らも、——になりぬべくてなむ」〔宇津保・俊蔭〕 ②「——をば、ゆゆしき者にこそ思ひ捨て給ふらめ」〔源氏・明石〕 **【解】** 「ゆゆしき者」は、縁起の悪い者、の意。

【雅言】 いたづらびと 用ニタヽヌ人をいふ **うつほとしかけ** 若子君なくなりしに尋あひたる所に 御供につかうまつりたりし人々は皆はなつき放たれぬ忠政らもいたづら人になりぬべくてなん 〇ヤクニタヽズイヒガヒナキモノの心也 **源あかし** 廿二 いたづら人をばゆゝしき物にこそおもひすて給ふらめど 注 流人をばと源の卑下の詞也 **同まきはしら** 廿四 よしかのさうじみはとてかくてもいたづら人と見え給へばおなじ事なり ○

北方の物ぐるひになりしをいふ

両者ともに「亡くなった人」の意味を立てていないが、CHJ で出てくる4用例（源氏×3、今昔物語集）中にもある「いでや、ただ今は、またいたづら人に見なしたてまつるべきにやと、あわたたしき乱り心地に、よろづ思たまへわかれず。」（源氏物語（夕霧））の例は、人が亡くなるという意味で解釈される場所であり、『古語大辞典』でもその用例の一つとして挙げられている。『例解古語辞典 第三版』が『雅言集覧』に引きずられたというようなことはあるまいが、『雅言集覧』でも注釈を付すことから分かるように、特段意味が取りやすい箇所ではない『宇津保物語』の例を注解なしで挙げるなど、『例解古語辞典 第三版』の「例解方式」に不審が残る項目である。

4. 3 『例解古語辞典 第三版』における『宇津保物語』用例

ここで、『例解古語辞典 第三版』が挙げる『宇津保物語』について残りの用例を全て確認しておく（体裁は適宜変更し、傍線を付した）。

- いきほふ（勢ふ）①勇み立つ。「もの騒がしきまで人多く一・ひたり」更級日記、
②時勢にあつて栄える。権力をふるう。「御方がたは豊かに一・ひて」宇津保物語
 語
 いましむ（戒む・誠む）① 教えさとす、注意する。(a)「御文にも『(姫君ヲ) オロカニ (=イイカゲンニ) もてなし給ふまじ』と、かへすがへす一・め給へり」源氏物語（濡標）、(b)「みづから一・めて、おそるべく慎むべきは、この惑ひなり」徒然草、②とどめる。禁止する。「人の一・むる五月は去ぬ。今はかのこと (=結婚ヲ) なし給へ」宇津保物語、③しかる。「『遅く率て参る (=イツマデモ連レテ来ナイノデハナイカ』と一・め言へば」宇治拾遺物語、④縛る。罰する。「されば、盗人を一・め、僻事 (=悪事) をのみ罪せむよりは」徒然草
 いらなし① (みっともなさ) 特にはなはだしい。「わが様 (=ヨウス) のいと一・くなりたるを思ひけるに」大和物語、②荒あらしい。とげとげしい。「印ことごとしく結び出でなどして一・くふるまひて」徒然草、③強い。鋭い。(a)「天下の一・き軍 (=兵士) なりとも、打ち勝ちなむや」宇津保物語、(b)「一・き (=鋭イ) 太刀をみがき、刀をとぎ、剣をまうけつつ」宇治拾遺物語
 いろ（色）一①色彩。「鏡には、一・形なきゆゑに」徒然草、②美しさ。華美。「今の世の中、——につき、人の心、花になりけるより」古今集、③豊かな心。情緒。「東人は、わが方なれど、げには、心の——なく情けおくれ」徒然草、⑤喪服の色。「宮の御果ても過ぎぬれば、世の中——改まりて (=喪ガアケテ)」源氏物語（少女）、⑥種類。品。「目に見ゆる鳥・獣、——をも嫌はず殺し食へば」宇津保物語、二① (女性の髪などの) つややかで美しいようす。「髪、——に、こまごまとうるはしう」枕草子、②好色なようす。「いと——なる御心ぐせにて」大鏡

これらの中で、「いろ」を除く3例は『雅言集覧』でも同じ用例が挙げられている。『宇津保物語』を含む『雅言集覧』の用例をそれぞれ下に示す。

いきほひて・いきほひたり 「御方々はゆたかにいきほひて七の宝をやらん方なくてそおはしますめれ」宇津保物語、「民部卿の同じ腹の六の君年十八子ふたり又うみ給はんとするといとおほくいきほひたり」宇津保物語、「此国の守の北方もまうでたりけりいかめしくいきほひたるをうらやみて」源氏物語（玉鬘）

いましむ 教戒の戒 制禁の禁也 心をつけよと教へさとす意 又 忌み禁ずる意也 「すきたわめたらん女には心おかせ給へあやまちして見ん人のかたくななる名をもたてつべき物なりといましむ」源氏物語（帚木）、いましむる「かく人のいましむる五月はいぬ今はかの事なし給へ 忌禁する心也」宇津保物語、いましめ「木守に雪山守らす所にこれがうしろめたきまゝにおほやけ人すましをさめなどしてたえずいましめにやり七日の御せくのおろしなとをやりたれば云々」枕草子、「さてもねたく見つけられにける哉さはかりいましめつる物を」枕草子、「若無比丘と仏のせちにいましめ給へるよ」狭衣物語、「すぐれたる上手ともをめしとりていみじういましめて又なきさまなる絵ともをなき紙ともにかきあつめさせ給ふ」源氏物語（絵合）、「若きをのこどもはさるへき事は召つかはせ給へ必そのころさし御覽せられよといましめ侍るなど聞え給ふ」源氏物語（竹河）、いましめとゝのへ いましめは禁錮の禁にてとゝのへは調する意にや 「御らんじゆるしつゝいましめとゝのへさせ給はす」源氏物語（若菜上）、いましむ 是は後世縛する事にいへると同意也 いましめ 「人やにすゑられぬふかくとどこめておもくいましめておけと宣旨をくたされぬ」宇治拾遺物語

いらなく 大和物語の抄にことごとしきさま也とあり 「芦刈の段此男まもればわがめに似たり云々わがさまのいといらなくなりけるを思ひはかるにいとはしたなくて芦も打すてゝはしりにげにけり」大和物語、「きさいの宮もいといたうなき給ふさふらふ人々もいらなくなんなきあはれがりける」大和物語、「大なる猿の云々むしりわたをきたるやうにいらなく白きが毛はおひあがりたるさまにて」宇治拾遺物語、「文はさみに文はさみていらなくふるまいて」大鏡、「印ことごとしくむすび出なとしていらなくふるまひて」徒然草、いらなき「天下のいらなき軍なりとも打うちなんや」宇津保物語

『例解古語辞典 第三版』「いきほふ」の項目では、『更級日記』と『宇津保物語』の例が挙げられている。CHJ や『日本古典対照分類語彙表』でも「更級日記・源氏物語」の2例しか出てこず、「読まれる」という面でも意味の面でも『更級日記』の用例が挙げられるのには相応の理由が認められる。『源氏物語』の用例よりも『宇津保物語』の用例が採られたのは、短いフレーズで意味が伝わりやすいという意図であろうか。『雅言集覧』ではやや後ろに長い引用をしているが、「権勢をふるう」という意味であれば『源氏物語』用例の方が文脈から読み解きやすくも感じられ、敢えて『宇津保物語』を使う意図が見えてこない。

「いましむ」は、CHJ では「枕草子×6 源氏物語×12、今昔物語集×30、宇治拾遺物語×7、海道記×2、十訓抄×7、とはすがたり、徒然草×2」の67例、『日本古典対照分類語彙表』では「枕草子×4、源氏物語×8、宇治拾遺物語×6、平家物語×10、徒然草×2」の30例が挙げられている。あまり読まれないとされる『宇津保物語』の用例

を取るということは、他の用例よりも語義を示す文脈的優位性が認めらるということになるであろうが、試みに『日本国語大辞典 第二版』の当該箇所を引いてみると次のような分類になっており（中世前期の用例を抄出）、典型的な「禁止」の用例とは言い難いようである。

(2) 行動を禁止したり、抑制したりする。

(イ) してはいけないと制止する。行なうことを禁じる。

*狭衣物語〔1069～77頃か〕二「法師などだにも、かかる事は難きにや。若無比丘（にやくむびく）と仏のせちにいましめ給へるをこそ、思ひ至らぬくまもありがたからめ」

*栄花物語〔1028～92頃〕花山たづぬる中納言「かかる人は世にありてはおほやけの御ために大事いでき侍りなん。かやうの事はいましめたるこそよけれ」

(ロ) よくない行為を再びしないように、しかる。

*枕草子〔100終〕一六一・故殿の御服のころ「『ありしあかつきの事いましめらるるは。知らぬか』とのたまふにぞ」

*今鏡〔1170〕九・真の道「あるじの使にて、石の帯を人に借りてもてまかる道に、落して侍れば、あるじに重くいましめられんずらん」

*宇治拾遺物語〔1221頃〕八・四「『遅く率（み）て参る』といましめ云へば」

(3) いやだと思ふ。嫌う。忌む。

*宇津保物語〔970～999頃〕藤原の君「かく人のいましむる五月（さつき）はいぬ」

『宇津保物語』の例は『雅言集覧』でも「忌み禁ずる」の意味で用いることが注記されており、『日本国語大辞典 第二版』の立場に通じる。辞書ごとに解釈の違いは当然あってしかるべきだが、解釈の余地がある用例を注解も付さずに示す点からすれば、ここでも『例解古語辞典 第三版』に疑問が残る。むしろ、「例解方式」がもたらす説得力としては『雅言集覧』にもアドバンテージがあり得ると言える。

「いらなし」については、CHJでは「万葉集、大和物語×2、大鏡×2、宇治拾遺物語×2、十訓抄、徒然草」の9例が見つかり、『日本古典対照分類語彙表』でも「万葉集、大鏡、宇治拾遺物語×2、徒然草」の5例が挙げられている。『雅言集覧』が網羅的に挙例しているとともに、『例解古語辞典 第三版』との対応から考えれば、幅広い語義の用例が意図的に示されていた蓋然性も高くなる。その点で言えば、「いろ（色）」が「種類」の意味で使われている『宇津保物語』の用例が『増補雅言集覧』の増補部分に見られることから、『雅言集覧』の増補時の意図を探る手掛かりになり得る。『雅言集覧』の近現代辞書への影響という点では増補版の果たした役割も小さくないため、増補版を含めた考察は稿を改めて行いたい。

『宇津保物語』の扱いを通して見ると、全体的に『例解古語辞典 第三版』の不備や不徹底が目立つ。『宇津保物語』は資料性にも難のある作品であり、『例解古語辞典 第三版』全体を通じてその扱いを確認していく必要が浮かび上がる。

4. 4 意味区分と『雅言集覧』用例との対応

ここまで見てきたように、『雅言集覧』が掲げる用例の中で『例解古語辞典 第三版』の立てた意味区分と重なるものが散見される。そこで、『例解古語辞典 第三版』と『雅言集覧』の用例が1つでも重なる185項目の中から『例解古語辞典 第三版』が1例しか挙げていない103項目を除いた82項目の中で、「『例解古語辞典 第三版』が中世前期までの用例を掲げた意味区分の数」と「意味区分ごとに『雅言集覧』と一致した数」を検証する。例えば『例解古語辞典 第三版』で意味区分が1つしかない場合に(a)(b)と2つの用例が掲げられていても、当然ながら意味区分の数は1つであり、『雅言集覧』が(a)(b)に対応する用例を示していても、意味区分ごとに一致する数もまた1つとなる。『例解古語辞典 第三版』が中世前期までの用例を掲げた意味区分の数が1の場合には当然「意味区分ごとに『雅言集覧』と一致した数」も1になるためこれを省いてまとめたものが次の【表4】である。

見出し項目	『例解』	『雅言』	見出し項目	『例解』	『雅言』	見出し項目	『例解』	『雅言』
いうそく	4	1	いだす	6	1	いひあはず	3	1
いかが	3	1	いたつく	2	1	いひつく	5	2
如何は	4	1	徒らになる	2	1	いひよる	3	1
如何はせむ	2	1	いたづらびと	2	2	いぶかし	3	1
いかさま	2	1	いたはし	2	2	いふかひなし	2	1
いかし	3	1	いたり	2	1	いへる	2	1
如何でかは	3	1	いち	2	1	いま	4	1
いかでも	2	1	いちはやし	3	3	今は	2	1
如何ならむ	4	3	何時か	2	1	いまいま	3	2
いかる	2	1	いづ	6	1	いまいまし	3	1
いきどほる	2	1	いつしか	3	1	いましむ	4	1
いきほひ	2	1	いづら	2	2	います	4	2
いきほふ	2	1	いづれ	2	1	いまやう	2	1
いきまく	3	2	いで	3	2	いみ	3	2
いくばく	2	1	いでく	3	1	忌む事	2	2
いくらも	2	1	いでたち	3	2	いらなし	3	3
いさ	2	2	いでや	2	1	いららぐ	2	2
いさや	2	1	いでる	3	1	いりたつ	3	1
いさよひ	2	1	いと	2	1	いろいろ	2	1
いそがくる	2	2	いとなみ	3	1	いろどる	2	1
いたく	2	1	いとま	2	1	いろふ	2	1
いたし	4	1	いなや	2	1	いろふし	2	1
いだしぐるま	2	1	古への人	2	1			

【表4】

表では、「『例解古語辞典 第三版』が中世前期までの用例を掲げた意味区分の数」を「例解」、「意味区分ごとに『雅言集覧』と一致した数」を「雅言」と略し、2つ以上一致しているものに網をかけ、完全に一致するものを太枠で囲っている。表から分か

る通り、『例解古語辞典 第三版』が複数の意味区分を立てて中世前期までの用例を配置している項目において、『雅言集覧』が挙げた用例を別のブランチに配置しているものは17例(25%)見られ、完全に一致しているものも9例見られる。この割合は決して高くはないが、現代的知見で厳選された古典の用例と『雅言集覧』の用例が無視できない割合で重なっている。もちろん、『雅言集覧』において『例解古語辞典 第三版』採用の用例と一致しない用例は多々あり、それらが『例解古語辞典 第三版』の意味区分と対応していることも十分考えられる。そのため、『雅言集覧』が古典語の意味の広がり配慮して用例を掲出している蓋然性は十分高いと考えられる。

4. 5 文脈における用例の切り取り方

最後に、『例解古語辞典 第三版』と『雅言集覧』の用例の切り取り方を比較しておく。先に見たように、『例解古語辞典 第三版』は「その語句が文脈からよく理解できるもの」として用例を切り取り、「適切な用例でも構文の解きほぐしや文脈の補いが必要な場合には「解」を添えて全体の意味が通るように」しているという。『雅言集覧』の用例も適宜注解が付されており、同様の趣旨で切り出されていると推察できる⁶⁾。そこで、『例解古語辞典 第三版』と『雅言集覧』が共通して掲げた215例(185項目)について、両者の一致具合を見てみると次のようになる。

①【例解】用例と【雅言】用例が完全に一致	99 (46%)
②【例解】用例が【雅言】用例よりも長い	29 (14%)
③【例解】用例が【雅言】用例よりも短い	65 (30%)
④【例解】用例と【雅言】用例にズレがある	22 (10%)

①は『例解古語辞典 第三版』と『雅言集覧』の用例の切り取る部分が完全に重なっているもの、②③はどちらかが前或いは後ろにかけて長いもの、④は同じ場面を抜き出しつつ前後にズレていたり、途中の省略箇所がズレていたりするものである。なお、②③④もあくまでも同一箇所の範囲内であり、基本的には一致しているとみなせるものばかりであるが、厳密に比較した結果である。また、短歌用例も必ずしも一首丸ごと掲出されるわけではないことを付記しておく。

『雅言集覧』も紙幅に苦労した書物だが、用例以外の語釈は簡素を極めるため、『例解古語辞典 第三版』を含めた現代の古語辞典より用例に費やせる文字数が多いことをふまえると、③がある程度多くなることは理解しやすい。特筆すべきはやはり①が半数近くを占めるという事実である。『例解古語辞典 第三版』よりも文字数・分量を割くことができる状況において、『例解古語辞典 第三版』と完全に同じ用例の切り取り方をしているということは、『雅言集覧』の用例が現代的視点から見ても必要にして十分と言える的確性を備えていたのであろう。

5. まとめ

『例解古語辞典 第三版』は独自の用例を立てていることを売りにしている辞書であるが、存外『雅言集覧』と重なる用例が多いという印象を受ける。『雅言集覧』を直

接参考にしたか否かということではなく、改めて『雅言集覧』編者石川雅望の用例探索能力と構成力に驚かされる。

『雅言集覧』をめぐる課題として、どのような用例を抜き出しているのかという大きな問いが残されている。今回の調査を通じて、親見出しのレベルで区分があるものは意味によって選定されているとして、それ以外にも語義の微妙な揺れや異なる用法を積極的に集めているという蓋然性が高まった。

石川雅望が古語に対してどのような意味区分を施していたのか調査するのは容易ではないが、解釈の揺れが少ない諸注釈書と丹念な比較とは別に、現代古語辞書の分類を当てはめていくことの有用性も改めて見えてきた。典拠の重なり具合がポイントとはなるが、『例解古語辞典 第三版』はブランチを細かくし過ぎないという点で比較材料としやすい。ただ、両者の解釈のズレも目立つことから、『日本国語大辞典 第二版』のような大部でブランチの細かい辞書との対応も別途考えていくことが必要である。他にも特徴的な古語辞書はたくさん知られているため、もうしばらく（現在発行されているか否かに拘わらず）古語辞書と『雅言集覧』との比較をしていきたい。

【注】

- (1) 小西甚一『基本古典辞典』（1966、大修館書店）の「はじめに」に書かれた批判は有名である。古語辞典に関する先行研究についての詳細は、拙稿（2021）を参照されたい。
- (2) 刊行が頓挫してしまった『時代別国語大辞典』の平安・鎌倉編を補う形で『古語大鑑』（東京大学出版会が刊行中である）。
- (3) 第二版は別冊での対応となっている。
- (4) 『雅言集覧』でも室町期の勅撰集を入れており、「上代・中古・中世（前期）・中世（後期）」といった現代的な時代区分では単純には分けられない。
- (5) 『雅言集覧』の用例の切り取り方については、拙稿（2019）で多角的に検討している。

【参考文献】

- 犬飼守薫（1985）「国語辞書『官版語彙』と雅語辞書『雅言集覧』とのかかわり」（『椋山国文学』9）
内田久美子（2016）「『言海』と先行辞書について——『雅言集覧』を中心に」（『清泉語文』5）
平井吾門（2019）「『雅言集覧』の散文用例試論」（『近代語研究』21）
平井吾門（2021）「小学館『古語大辞典』を通して見る『雅言集覧』」（『近代語研究』22）
湯浅茂雄（2002）「『訂正増補和英英和語林集成』「和英の部」の増補と『和訓栞』『雅言集覧』『官版語彙』」（『国語学』53-1）

【調査資料】

- 『雅言集覧』国立国会図書館デジタルコレクション所収請求記号 837-79
『日本国語大辞典 第二版』（小学館、「ジャパンナレッジ」<https://japanknowledge.com> 利用）
『古語大辞典』中田祝夫編、小学館、1983
『例解古語辞典 第三版』小松英雄他編著、三省堂 1992
『古典対照分類語彙表』宮島達夫・石井久雄・安部清哉・鈴木泰編、笠間書院、2014
国立国語研究所（2020）日本語歴史コーパスバージョン 2020.3

https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/

【付記】

本研究はJSPS 科研費 20K00651 の助成を受けたものです。